

2020年度第4四半期 決算報告

説明要旨

2021年 4月28日

【説明会資料】

<https://www.zeon.co.jp/ir/financial/bs/pdf/210428.pdf>

【説明内容】 (取締役執行役員 松浦 一慶)

p.2 2020年度 第4四半期 総括と各セグメントの概況

合成ゴムの需要回復等を受け、Q4業績は前年同期・前期と比較し増収増益となった。新型コロナウイルス感染拡大による調達および生産への影響はない。

エラストマー素材の概況は、合成ゴムの需要は回復、化成品の需要は堅調。ラテックスは、医療・衛生用手袋向け需要が引き続き堅調に推移。

高機能材料の概況は、光学フィルムは中小型向け需要の端境期にあたるも、大型向けの需要は底堅く推移。

光学樹脂、電池材料、化学品等の需要は引き続き堅調。

p.3 事業環境 (為替・主原料推移)

為替は、USドルが前期比でほぼ横ばい、ユーロはやや円安で推移した。

主原料は、国産ナフサが前期比で24%価格上昇したのに対し、ブタジエン価格は17%ほど下落。Q4のブタジエン価格は、1月から2月末にかけて旧正月の関係で下落していたのに対し、3月に入ってから需要が回復し、3月平均価格は\$1,125と、ほぼQ3の価格レベルまで戻ってきていることを申し添える。

P.5 2020年度 Q4 業績サマリー

売上高 857 億円、営業利益 123 億円、経常利益 157 億円、当期純利益 103 億円。

対前年同期比では、売上高 62 億円増、営業利益 78 億円増。対前期比では、売上高 68 億円増、営業利益 12 億円増。通期の比較では、売上高 200 億円減、営業利益 73 億円増。

P.6 2020年度 Q4 業績サマリー (セグメント別)

売上高については、エラストマー素材、高機能材料ともに対前年度、対前期比で増加、営業利益はエラストマー素材、前年度比および前期比で増加した。高機能材料は前年度比で増加したものの、前期比では9億円ほど減少した。

P.7 2020年度通期 業績サマリー (セグメント別)

エラストマー素材の2020年通期の売上高1,616億円、前年同期比で172億円の減少。合成ゴムを中心に、前半にコロナで落ち込んだ分を下期全体で補完するには至らず、減収となった。一方で、営業利益は、エラストマー素材26億円増加、高機能材料は46億円増加という結果となった。営業利益の差異分析については、この後ご説明する。

P.8 通期営業利益 21年1月予想との差異

こちらのウォーターフォールは、今年1月末の四半期決算発表の際に、昨年10月時点と比較して営業

利益の見通しがどうなるかをお示したものである。

昨年1月時点では、市場要因として102億円増加と予想したのに対し、エラストマー素材が14億円、高機能材料が17億円上振れたとともに、内部要因として不急のコスト圧縮等の効果が発現した結果、予想を上回る結果となった。

P.10 エラストマー素材 概況

左は国産ナフサとエラストマー素材の売上高の推移をお示したものの、右は19年度Q1の出荷量を100とした場合の指数を棒グラフでお示ししている。20年度Q1以降、合成ゴム出荷量は回復しており、売上高も回復した。

P.11 エラストマー素材 P/L

出荷量については、合成ゴム、ラテックス、化成品ともに堅調に推移した。Q4の売上高は472億円と対前年比で9%増加、対前期比でも10%増加した。営業利益は70億円。対前年度比で59億円の増加、対前期比で25億円増加している。

合成ゴムは出荷量が回復。ラテックスは医療・衛生用手袋向けが引き続き堅調、化成品は需要が底堅く推移した。

P.12 エラストマー素材 営業利益差異（対前期）

出荷が増えたことで営業利益が14億円増加し、販売価格の改善により31億円増加した。一方で、マイナス方向に振れたのが原価と販管費である。販管費は海上運賃等の上昇を受け、対前期比で▲10億円となった。

P.13 エラストマー素材事業 要因別 営業利益差異（対前年度比）

出荷量については、前半にコロナの影響を受け、特に合成ゴムの出荷が伸び悩んだ分を後半で挽回しきれず、▲22億円。原価差については、原価が相対的に安価で推移し110億円ほどプラスの要因としてカウントされた。一方で、価格は原料価格の下がり分より下がらず、▲72億円に留まった。この差が全体のプラスに効き、最終的に26億円の増加で着地した。

P.15 高機能材料の P/L

売上高は、対前年度で6%の増加、対前期比で7%の増加。営業利益56億円。前年度比で16億円増加、対前期比では9億円減少している。

高機能樹脂関連については、光学フィルムは中小型向け需要が端境期の一方で、大型向けは堅調を維持。光学樹脂の出荷は引き続き堅調。電池材料、化学品の出荷も堅調に推移した。

P.16 高機能材料 営業利益差異（対前期比）

販売価格の調整差、販売構成差により価格差として7億円マイナスに振れた。販管費は、エラストマー素材同様、海上運賃の上昇分、また、フィルム中心に試作費用が発生し、7億円マイナス方向に振れた。これら2つの要因で、前期比で9億円ほど営業利益が減少した。

P.17 高機能材料 営業利益差異（19 vs 20年度通期）

出荷増により30億円プラス。原価差57億円プラスのうち半分が原価低減と製造固定費削減、もう半分は原料価格が下がったことによる恩恵である。販管費差は、Q4同様、海上運賃の上昇が効き、結果として営業利益46億円のプラスとなった。

P. 18 電池材料の状況（出荷量）

EV 向けは中国向け・欧米他向けともに出荷量は堅調に推移。民生向けについては、モバイル（中小型）用途向けは需要の端境期、産業用途（ESS）は通期で前年度並み。結果、全体として堅調に推移した。

P. 19 光学樹脂の状況（出荷量）

光学用途、医療用途ともに需要は堅調だが、今年7月完工予定の能力増強工事および主力工場の定期検査期間に備えて、引き続き出荷量を調整している。

P. 20 光学フィルムの状況（出荷量）

光学フィルムは中小型向けが端境期であるが、一方で、タブレット向けは1月末の当社予想より落ち込みが少なく済んだ。大型向けは、対前年比・対前期比とも103%と予想より落ち込まなかった。数量ベースでは、全体として対前期比99%の結果になった。

P. 22 B/S 概要

総資産 4,488 億円（437 億円増）

自己資本比率 65.8%（2.3 増）

P. 23 C/F 概要

営業キャッシュフロー561 億円と大幅増。

投資キャッシュフロー302 億円、フリーキャッシュフロー258 億円。

P. 24 2021 年度通期業績予想と配当金予想

売上高については、20 年度から微増の 3,100 億円予想。

営業利益については、ほぼ 20 年度並みの 330 億円予想。

配当金については、中間期末 12 円、期末 12 円の年間 24 円配当を予想。対前年度比で 2 円の増配。

P. 25 資本的支出予想等は、ご参考いただきたい。

以上